

八月十六日

朝はゆっくりした。地下は明日から休暇に入る。休んで何なのかな。考えて見れば私なんかは連日遊んでいるようなものだし、ことさら休みと言ってもね。仕事してゆっくり遊ぶしかない。

十一時より地下ミーティング。八月後半のスケジュール。担当その他の確認。十三時終了。学校へ。何だか雲行きが怪しくなってきた。今日は夕立ちが来そう。十五時学校。キャンパスは人影も無く心地良い。研究室には住宅建築の編集の女性が来ていて、一人でスライドのセレクションをやっていた。何度か会っているが、良く頑張る女性のように。こういう女性は山を越え谷を渡っても探し出す価値がある。平凡なようで非凡なのだ。十六時野田鈴木夫婦来室。秋は現場が七ヶ所になる。慎重に、確実にこなし、てゆく積もり。仕事が多いにこしたことはないが、貧乏ヒマ無しは困るよね。

ヨルク・ネーニッグ世田谷村来。ギリシャのクリソストモスの兵役は3年間だそうで、彼の年令での3年のブランクは大きい。

八月十七日

高曇り。七時屋上菜園に上る。何日か上らなかつたら菜園は気のせいか荒れかかっていた。ピーマン、ニガウリ、トウガラシを穫る。大まつよい草もさすがに勢いを失くし始めた。

朝イワシ煮込み玉ネギ輪切り、煮ボシ納豆オクラたらこ白飯。

何だかあっさりしているようで、記してみると充実しているな、今日の朝食は。今日は軽井沢の磯崎邸へうかがうが、久しぶりに磯崎新の話を聞くのは楽しみだ。十三時前軽井沢駅。少し早く着き過ぎたので駅前の茜屋でコーヒーとカレー。昼過ぎ磯崎宅。相も変わらず巨匠は元気だった。話の展開もスピードがあつて若い。愛子さんの歩き振りも本人が言う程悪くない。良くなっていた。昼過ぎからスペインから来た特別な生牛ハムをさかかに飲み始める。磯崎さんの料理は定評のあるところだが、手際が良い。家内も手伝う。十八時夕食。音楽家細川さん来。彼も世界中飛び歩いているようで、時差ボケの話となる。私だけだ暑さボケは。磯崎さん七三才。愛子さん七三才。社会の変転を受け取めながら意志を貫いてきている。その姿勢が見物なのである。磯崎さんみたいな成熟の仕方は私にはできない。別の方向に行くしかない。「書」を始めた磯崎さんの習作をなんとか手に入れたい。それで茶室を作ったら面白い。それで「反古亭」なんてのはどうだ。書は上海でやるという。支那服なんか着て。きつと似合い過ぎるぜ。トリノ近くの特別なバローロを飲んだがうまかった。

八月十八日

朝七時起床。八時過上のテラスに上っていったらすでに巨匠は新聞を読んでお茶を飲んでいた。朝食しながら十時過までおしゃべり。虚体からアイコンへと磯崎さんの思考は廻り始めているようだ。今、世界で起きている事は問題解決型の機能主義的思考では対応できない。問題提起型、問題作成型の姿勢ではないと不可能だと、そのキーがアイコンのようなものだと言うのが彼の最近の思考の中心のようだ。イヨイヨ大団円に向けて動いているのだから。それにしても磯崎さんの思考は停滞していないのが良く解

る。辻邦生先生宅に人の気配があつたが、気のせいかも知れない。辻先生には何度もお目にかかったわけではないが、先生は格式の高い清純な人であつた。亡くなった人間は姿形がはっきりしてくると言うが、本当だな。昼食は磯崎さん手製のパスタ。シンプルなガーリック味だったが美味であつた。ワインも。昨日から飲み続け喰べ続けのような気がする。昼過ぎ、北杜夫の会へ。阿川佐和子の可会で軽井沢文学サロンのようなものらしい。磯崎はタフだ。どんな集まりでも平気でこなしてゆく。俺はこういうの苦手。

九十才になられた坂倉準三婦人の美術館ル・ヴァンでお茶を飲み、夕食へ。南大門という韓国風焼肉屋で又も食事。驚いた事に何と腹にまだ入るではないか。マツカリがうまかつた。しかし、流石に体が重くなつてきた。夜、世田谷に帰る。台風が迷走しているようで明日の台湾行が心配である。台北から電話があつて李租原も心配しているようだ。なんとかなるだろう。二三時過チヨツと心配になつて鈴木博之宅に電話する。俺も気が小さい。原稿の負債がたまっているので仲々電話も出来なくなっているんだから。鈴木さんとは台湾行は初めてである。良い旅になればよいのだが。